フィリピンをもっと知ろう③

フィリピンと日本　こぼれ話

高原の避暑地バギオへの道「ベンゲット道」開通に活躍した日本人の血と汗の物語

昔からフィリピンと日本とはいろいろな交流がありました。今回は、明治時代にフィリピンの開発に汗と命をかけた日本人の姿を紹介します。

日本が明治時代であった 1889 年（明治 22 年）末、フィリピンはスペインの植民地から米国の植民地となり、多くの米国人が植民地開発のためにフィリピンにやって来ました。

バギオはマニラの北約 250 キロの松林に囲まれた標高約 1500 メートルの高地にあり、熱帯モンスーン気候のフィリピンの中で、日本の軽井沢のような避暑地の気候を有しています。

マニラにやってきた米国官僚はマニラの暑気に悩み、避暑のため北方の高地バギオに行きたいのですが、バギオ付近の山岳地帯の渓谷道は細く、とても車で行ける状態ではありませんでした。そこで米国植民地政府は、フィリピン人と中国人を雇ってバギオに至る自動車道路工事で最も難工事の山岳道路「ベンゲット道」の工事を開始しました。1900 年（明治 33 年）に開始された工事は難工事を重ねマラリアで倒れる者、熱射病に倒れる者が続出し、工事人夫は逃げ出して、ついに工事は中断してしまいました。困った米国植民地政府は 1903 年（明治 36 年）米国人ケノン少佐を工事主任とし再度工事を

進めることとなりました。その時、ケノン少佐は米国カリフォルニアでいかなる困難な仕事であっても歯を食いしばって耐え、荒野を立派な楽園に変えた仕事をしている勤勉な日本人のことを思い出したのです。そうだあの日本人たちであれば困難な道路工事であってもきっとやり遂げてくれるはずだと。早速、ケノン少佐はマニラの日本領事館に工事人夫募集の話を持ち込みました。その結果、神戸渡航合資会社と契約し日本からの人夫の募集を行ったのです。

こうして募集の広告を日本国内で見て契約した人たちが、日本から 1903 年 10 月 16 日に第１回の 115 名が東洋汽船会社の「香港丸」に乗ってマニラにやってきました。この年に日本本土から 648 名、日露戦争真最中の翌 1904 年（明治 37 年）に沖縄から 360 余名がそれぞれフィリピンに渡り
工事に携わったのです。やがてバギオに至る山岳地帯で道路工事が始まりました。岩山を砕き、深い谷に橋を架ける難工事、マラリアを媒介する蚊がぶんぶん飛び回る劣悪な環境と粗末な食料のため、多くの日本人が工事途中で次々病に倒れました。工事期間中の不慮の事故やマラリア、アメーバー赤痢、脚気などの病気で約 700 名の日本人労働者が犠牲となったと言われています。しかし工事に携わった日本人たちは困難な工事をやり通しました。ついに 1905 年（明治 38 年）バギオに至る「ベンゲット道」は完成しました。こうしてマニラの人々はフィリピンの軽井沢であるバギオ市に気軽に避暑に出かけることが出来るようになったのです。

今ではバギオ市は著名な観光避暑地となり、日本からの観光客も多く訪れ、過ごし易い気候のためゴルフを楽しむ方も多いようです。

しかし、マニラから車でバギオに向かうとき「ベンゲット道」の１メートル毎に道路工事に流された明治の日本人の血と汗と命に想いをはせて頂ければと思います。

なお、この道路は完成後、建設の監督指揮をした米国人ケノン少佐を記念して「ケノン道路」と名づけられましたが、日本人は土地の名前をとって、「ベンゲット道」と呼び今に至っています。

次回は この「ベンゲット道」開発から始まったともいえる、チボリ族の住むミンダナオ島 「ダバオの開発物語」 を紹介したいと思います。(編集部)